道灌と芭蕉の諸國行脚

長谷川久一

最明寺時賴廻國に就て、方今否定說が行はれてゐると等しく、太田道灌の紀行文等が僞作なりとの說が專ら擡頭してゐる。文明十二年六月に、道灌が結城三郎兵衞藤原重純、小笠原九太夫源忠貞を江戸城の留守居にして、京都へ上つて行つたときの紀行文として知られてゐる「平安紀行」の如き、後世好事家の手になつた僞書として、渡邊博士から指摘せられてゐる。その所論のうち、直ちに吾人貧學徒にとつても、了解のつくのは、宿驛濱松の地名のことである。學問に於て及びもつかぬ筆者が、駿遠在勤者として、その土地に生活しその地方を家とした體驗から明かに共鳴禁じ能はざるものがある。博士は、紀行中に濱松といふ驛にてよめるとして、「浪かかる濱松かねを枕にて幾度さめぬ夏の夜の夢」といふ一首が載せてあるのを捉らへ、道灌時代には疋馬驛といつた筈であるから、其の時代の著作物ではない。一般に確實と信ぜられてゐる永祿元年閏六月に寫された「實曉記」のうちの東海道宿驛の列記にも疋馬とあるのを證據として擧げて居られるのであるが、全く其の通りであつて、今日と雖字は曳馬と變はつてはゐるが、飽くまでも疋馬（曳馬）の地にあとから冠せられたのが濱松といふ地名なのである。然らば何時頃から濱松といはれるやうになつたかといふ疑問が直ちに起つて來る譯であるが、筆者の私見をもつてすれば、この地には德川時代となつてから、東海道の要衝としていつも、有能な中堅譜代大名（例へは天保改革の水野越前守の如き）が封ぜられる例になつてゐるから、新來の城主　水野越前守は肥前唐津城から來た）のうちで、曳馬の地名よりも寧ろ雅致のある濱松といふ地名を採用したに始まるものと思はれる。兎に角博士の說かるる所はこの一事からいつても傾聽すべき次第と思ふ。又博士は時間的に論じ、文明十二年には、道灌は、年の始め以來長尾景春の軍に對し、武藏藤澤郡に戰ひ、續いて秩父陣となり、日野城攻擊となり、十一月頃まで武藏の北部で、攻

城野戰に寸暇も無かつた事實をもつて、六月に室町幕府へ參勤のため、京へ上ぼるといふやうな閑日月は無かつた筈と論斷せられてゐる。尙ほ進んで紀行中にある數首の歌につき、新續古今集、新後撰和歌集等にある名歌の替へ歌に違ひ無きもの多しといつて居られる。この點に關しては文學論になるから、よくは判らないのであるが、常識論として大膽に判斷して行けば、要するに治安の定まらぬ當時の事情として、常に風月を樂んで吟詠を事とする餘裕はそう十分にある筈がない。太田道灌は其の戰國亂離間に在つて、寸陰を惜んで和歌に精進したのは偉とするに足るとして、珍重された結果、その平仄を合はせるために道灌の作として傳へられるものが多いのであらうと思ふ。殊に江戸の開創者である所から、江戸の史料に權威を添へ光彩を加へたいといふ考から、江戸時代になつて僞作が出たのであらう。道灌の名を江戸の市民に忘れしめざるやうにと仕組まれたものに、道灌山がある。これは全く關小次郎長耀入道道閑の居城の趾に他ならぬのであつて、太田道灌の方が有名な餘まり、横取りされてゐるのである。そんなこんなで、實は年代も古し、史實の探究尙ほ今後に待つべきもの多きに反し、松尾芭蕉の紀行文、吟詠は時代も新らしいし、存分正確に傳へられてゐるから信憑に躊躇する必要がない。唯一事關口水道工事に俳聖が關係した動機に就ては、多少異說がある。論者或は芭蕉翁が江戸へ飛び出して來たものの早速生活に窮したから、水道工事でも何でも構はず傭はれて働いたと爲すものもある。又或は翁が始めて江戸へ出て身を寄せた北村季吟同門の平野杉風は、日本橋小田原町で、幕府の御納屋を務めてゐたのであるから、幕府に取入るためにこの工事關係者となつたのだとしてゐる。が併し之らの見方は何れも正鵠を得ない所のものと信ずるのである

芭蕉翁は、松尾儀左衞門の子で、正保元年十月伊賀國上野赤坂町に生れた。翁は天資頗る明敏で、幼時から好んで和漢の諸書を渉獵し能く文字を知つてゐた。明暦三年二月歳僅に十四にして藩主藤堂良精に仕へることになつたが、良精はその嗣良忠の近侍としたが、翁は年少ながらも、その職域に極めて忠實に奉仕したのであつた。良忠は蟬吟と號して風雅を好み、國學及び俳諧を北村季吟に學ばうとて、同年八月翁を隨へて京師に上りその教を受けた。時に年十二であるが、翁といふ絶好の近侍があり、良師に就き具さに教を受け滯京一年許りにして上野に歸つた。然るに寛文六年四月良忠二十一にして急死した。翁はその遺命を受けたので同年六月遺骨を齎して高野山に上り、之を報恩院に納め、厚く冥福を祈つて、上野に歸つたが、翁は深く良忠の夭死を傷んで、爾來旦に夕に、怏怏として樂まなかつたが、遂に意を決して致仕を願ひ出た。城主良精は夙に翁の才幹を愛してゐたので、容易に之を許さうとはせぬ。翁は已むことを得ず、翌七月同僚の士たる城孫太夫に對ひ、已が志のあるところを披瀝し、その夜孫太夫の門

の柱に、「雲をへだつ友かや雁の生別れ」と認めた一葉の短冊をつるしてその行衛を晦ました。時に年二十三で、これが即ち俳祖となつた門出なのである。併し關口水道工事に關係した翁の土木家として手腕力倆は、幕府側の認識する所となり、その儘に推移したならば、幕府の小普請組の單なる一員として終はつてしまつたかも知れなかつた。けれども元々この工事に渾身の精力を打ち込んだのは、功利のためや、榮達のためや、又は一時凌ぎの生計維持のためではなかつた。全くこの難工事が幕府によつて、藤堂家が施行方をお請けしたのを聞きつけ、舊主の恩誼に報いるのはこの時とばかり、翁は八面六臂の手腕を發揮して努力したのであつた。されば工事竣成と共に病と稱して辭し土木家として生涯に終止符をうつて元の俳人芭蕉に立ち戻つた。この危機は實に本邦文化の危機そのものであつたので、田中青山伯爵がそこに着眼し、關口の伯爵邸内に逸早く芭蕉庵を營まれたのは、眞の達見洵に敬服に禁へぬのである。翁は生れながらにして、俳人であり、二三年間の土木家生活は、舊主の恩誼に報いるため、藤堂家の一家臣として當然ふむ可き道に精進したに他ならなかつた。當時の關口あたりは、冬などは時雨まじりの西北風强く吹きつけて、隨分難儀せられたことであつたらう。而かも翁は、堅忍不拔の精神と燃ゆるが如き忠誠の心とをもつて、立派に工事施行を督勵して、江戸市民にとつての劃期的大土木工事完成の偉業を爲し遂げた、吾人今日關口大關橋畔に立ち今は野間邸内となつてゐる芭蕉庵を遙かに打ち眺め、土木家としても偉大なりし俳聖の鴻業を追懷して實に感慨無量なものがある。左に掲ぐる一句は、蓋し當時の俳を想見せしむるに足るものがあらう。

一としぐれ礫や降つて小石川

翁が常に舊主を思つて居た切々の情は、その臨終の時の樣子にも亦あらはれてゐる。翁が、大阪南久太郎町花屋仁左衞門の裏座敷で病革まるや、去來、乙州等相謀り、態夫を伊賀上野に走らせ故郷の兄妹、門弟などに知らすがよからうと一決したが、翁は隣室でこれを小耳にはさみ、斷然之を差し止めて云ふ、我はもと蒲柳の質なるに、しかも俳事に服しては、寒暑を厭はず身の攝生に意を用ふることなく、猥りに杖を曳いて深山幽谷を駈け廻りながら、今偶〻病に罹つたとて、突然之を知らさば一族のものども驚き且つ騷ぎて、遂には舊主をも惱ます恐れがある。假令今日を限りの命であつても沙汰せぬやう確と賴むと息も喘ぎながら云ひきつた。これにはならび居る門弟見舞客皆翁の忠愛の志深きに感じ入り、涙に咽んで暫く打ち伏したといふことである。一同の手あつき看護の甲斐なく翁は遂に永眠した。それがため上野に居た土芳は、翁が息を引き取つたあとで出した書面で始めて事の顚末を知り、急行花屋方へかけつけたが、一日一夜も病床に看護しなかつたことを殘念がつて、靈前へ來て聲涙共に下るのであつたが、

漸く氣を取り直ほし、せめて大阪での燒香に列なることが出來てよかつたと思ひ、手向けたのが左の一句である。

耳にある聲の外なり夕時雨　　土芳

この師ありて此門弟ありと謂ふべきである。殊に土芳は翁の死後門人たちに對し、一場の講演を試みたとき、翁の俳諧界に成功したことを稱揚し、古の英雄豪傑の偉業に勝るとも決して劣る處が無いといふたことがある。實に英雄豪傑の企てた事柄なるものは、洋の東西を問はず、電火の如く一時は目覺ましくて驚天動地の概ありとするも、一朝その肉體の亡ぶと共に忽ち消え失せて朧ろのやうになつてしまふのが例である。然るに翁が文藝上に貢獻し百世のもと尙能く人心を支配する權威に至つては、死後も亦嚴然と雄大な光彩を放つ宛ら天日の如く千古渝るところがない。翁の成功を以て英雄豪傑の偉業に勝ると道破した土芳が十分に列る人であつただけに、殊に一層味のあるやうに思はれるのである。

田中青山伯の如きも土州藩士として劍戟の下維新の鴻業達成に盡瘁され、その後陸軍にも永く奉仕された云はば、武人側の傑士であるが、能く芭蕉翁の一生涯の寸切の一重要時機を記念して其の遺跡顯彰に意を用ゐられたる洵に膽仰措く能はざるところたるを失はない。曩に昭和四年この庵を史蹟名勝として指定せられた。「五月雨にかくれぬものや瀨田橋」の名吟の如く、ここに餘韻流風千載に芳しきを喜ぶものである。（一八、五、二五）

○若葉吟社詠草（凧の卷）

紙鳶あげて吾子逞まし決戰下　　藤郷
鍬止めて紙鳶のうなりを仰ぎけり　　同
夕風を靜かに紙鳶の下りけり　　淺茅
風寒し大凧うなる港町　　同
富士晴れて紙鳶上げ競ふ子等並ぶ　　玉葉
野路晴や一と騷ぎして紙鳶あぐる　　同
紙鳶一つ夕暮寒き濱畠　　靜風
夕燒の蘆の小道を紙鳶歸る　　靜如
凧一つ上る軒端や桃盛り　　東邊僕
屋根向ふ日暮れ近くも紙鳶見ゆる　　翠山

○

引きづられじと氣負ひけり凧揚げ子　　野狐禪
風晴の牧の空碧し凧の數　　同
唸りかすかに凧見へずなりぬ潮臺　　同
切凧の田水すり行く尾の長し　　同
終日を据はりて暮れぬいかのぼり　　同